

## 「内輪で争えば」

マルコによる福音書 三章二〇～二七節

南山教会 二〇二六年三月一日

村山盛芳

礼拝堂にお集まりくださった皆さま、おはようございます。シルバーホーム「まきば」、名古屋東教会をはじめとしてYouTubeで礼拝にご参加いただいている皆さま、おはようございます。今日もご一緒に、みことばに聴きましよう。

さて、今日の聖書の箇所は、マルコによる福音書三章二一節以下の段落です。まず二一節「身内の人たちは」と語られます。三一節では再度、身内の人間が登場しますが、「イエスの母と兄弟たちが来て」と「身内」とは誰なのかより具体的に、説明されています。同じ事柄の記述が繰り返される、というのは、この福音書の著者マルコが、あえて意図的にそういう書き方をしている訳で、やはり「強調」ということでしょう。節の後半には、「『あの男は気が変になっている』と言われていたからである」という風に、身内の人々がやって来た理由が説明されています。

「気が変になる」という訳語には、翻訳者の苦労が偲ばれます。「エクセスター」というギリシヤ語が使われています。この言葉は英語の「エクスタシー」という単語の語源です。原形は「エクスターシス」と言い、「自分の存在から外へ出てしまう」という意味の言葉です。ですから、英語の聖書はそのまま直訳している場合が多いのです。“out of mind、つまり、「自分の外に出てしまう、我を忘れる、我を失う、恍惚状態になる」というような意味を表しているのです。「外に出る」イエスの生活の実際はその通りだったと言えるのです。

おそらくイエスは、母マリアはじめとする家族の中で、「大黒柱」のような存在であったことでしょう。壮年と言える年齢になるまで、家族の生活を支えてきたのです。ところがいつの頃かナザレの家を離れて、家出して、バプテスマのヨハネの宣教活動に関わり、ヨハネがヘロデに捕らえられると、今度は、自ら弟子たちを集め、「神の国」の宣教活動を始めてしまったのです。家出したまま帰って来ないのです。まったく家族の生活のことを顧みず、自分たち身内のことを忘れて、病人を癒し、貧しい人のケアをし、つまり他人のことばかり面倒見て、神の国の宣教をしている、まさに「エクスターシス」だ、「はずれ者」だということです。

但し、家族の者たちは、イエスの宣教そのものを「おかしい、気が変だ」と考えたのではないでしょう。そんな「宣教活動」のような胡散臭い仕事ではなく、もっと手堅い大工として働いてほしい、という訳ではないのです。当時、宗教活動をする者たち、例えば律法学者がたくさんいて、方々で人々に教えを垂れているのです。だが、どうせするなら、ナザレの自分の家を根城に、そこに腰を据えて、皆が集まって来るような営業をしたらよいではないか、というのです。家族の者たちにとって、家出して、自分の方から出向いて行って、赤の他人を尋ねて巡回する、という振る舞いをなぜするのか、どうしても理解できなかったのです。

今日のテキストのポイントは、「身内の無理解」という点にあるでしょう。マルコは、イエスの身近にいた人々の無理解という神学的主張を、福音書を通して底流のように語っています。今日の段落には、身内の人々の無理解に続いて、今度は「律法学者」の無理解が語られています。イエスが行う癒しのわざを、「ベルゼブルの力」だと言い立てるのです。悪口を

言おうとするなら、何でも難癖は付けられるものです。そもそも律法学者とは、イエスの同業者で、神の言葉を人々に教え、その真心を伝える仕事です。そうしたイエスと身近なところにいる人々が、イエスのことに無理解なのです。

確かに生活を共にする家族や近親は、世間には知られないプライベートな身内の様子を、いつも目の当たりにして生きることになります。だから内と外との落差に、「つまづく」ということが起ります。あるいは「自分のことは棚に上げて」とか、良い所は見えず、悪いところばかりが目につく、ということにもなるのです。「相手の目の塵は見えるのに、自分の目の梁には、気づかない」のです。ところがマルコは、確かにイエスの家族、身内の無理解を語り、同業者であるファリサイ派の人々の無理解を語り、ついには宣教活動の中で最も近い場所にいた弟子たちの無理解を、強調するのです。イエスの近くに居た人々は、皆、イエスのことを「まったく分かっていなかった」というのです。そして今の私たちにも、行間に問いかけているのです。「あなた方は分かってるのか」と。

「分からない」とか「無理解」とかが、どうして起こるのでしょうか。知識がない、浅くしか考えていない。本気で、向き合っていない、努力が足りない、どれも正解でしょうが、最も根本に横たわる問題は、「事柄」そのものから目を反らしてしまうから、ではないでしょうか。「事柄」そのものを見ようとしない、すると「無理解」が起こるものです。今まで散々病に苦しんで来た人が、イエスによって癒された、それを知って、「これまで辛かったねえ、治ってよかったねえ」と素直に喜ぶことはできないのでしょうか。事柄によって判断する、受け止めるとは、そういう態度のことです。教会で、誰かが重い病に罹り、あるいは試練に打ちひしがれている人がいる、すると、皆の元気がなくなる。そしてその人々が恢復

する、元氣を取り戻す、とその当人ばかりか、他の皆も元氣を回復する、ということがしばしば起こります。それは、教会が「事柄」そのものを受け止めるからなのです。規則や手続き、慣例云々をいう前に、悲しみや喜び、嘆きや赦し、人間には本来、負い切れない、「事柄」そのものを何とか受け止めようと、祈り、分かち合おうとするからです。

マルコの主張することも同じです。身内の人、身近にいた人々は、イエスを理解しなかった、分からなかった、それは「事柄」を見ようとしなかったからだ、というのです。ではそもそもイエスの「事柄」とは何でしょうか。それは「十字架」です。病む人を癒し、貧しい人々と共に食事をし、神の国の福音を伝えるという、イエスの働きが行き着く先は、まさに十字架に架かり血を流されることだったのです。そのようにして神の赦しの愛が、すべての人の人生に表されるのです。イエスの歩みを、十字架という事柄から見えないならば、イエスのまことを知ることはできないのです。「事柄」をそのまま見れば、すべての出来事にイエスがふれていることに気づくでしょう。イエスの十字架を見ることは、自らが負う十字架を知ることなのです。